

顎顔面放射線学分野

教授 林 孝 文

当分野は、歯科放射線学講座として、1980年8月に歯学部を設置された。初代の担当は伊藤寿介名誉教授であり、現在は2代目である。業務内容としては、歯科における放射線学に関する教育、研究、診療ならびに社会的活動を行っており、診断部門と治療部門に大きく分けることができる。

診断部門では、エックス線写真、CT、歯科用コーンビームCT、MRI、超音波診断等を用いて、各診療科からの依頼を受け、顎顔面領域の疾患の診断、治療方針決定、治療後の経過観察のための画像診断を行っている。モダリティとしては、歯学部総合病院において、単純エックス線検査ではパノラマ3台、デンタル3台、セファロ1台、CT検査では全身用CT装置3台、歯科用コーンビームCT装置1台（パノラマとの複合機）、MRI検査ではMRI装置3台、超音波検査では超音波診断装置3台（据置型1台、携帯型2台）を日常診療において利用している（CTとMRIは医科と共同利用）。治療部門では、各診療科のがん治療医、看護師、薬剤師と連携しつつ、歯や口腔と関連する副作用対策を行うとともに、化学療法や放射線治療中だけでなく、治療後の生活の質の維持のための口腔管理を行っている。

研究テーマとしては、診断部門では顎顔面領域の画像診断全般をカバーしつつ、特に患者の生命予後に直結する口腔がんや頸部リンパ節転移の診断精度向上に力点を置いている。また、顎骨の炎症性疾患、顎変形症や顎関節症などの頻度の高い疾患における画像診断の有用性の検証も行っている。モダリティベースでは、MRIにおけるT2マッピングや拡散強調画像、CTにおけるダイナミック撮影、超音波診断におけるドプラやエラストグラフィの応用など独自の取り組みを行っている。特に、超音波診断の歯科領域のさまざまな疾患への臨床応用を検討しつつ、エックス線検査の

次世代として広く普及を目指す活動を行っており、webサイトの整備や実技研修会の開催などの学習リソースの提供を進めている。加えて、検査に伴うエックス線被曝に関する検討や診療ガイドラインの策定などを通じて、患者にとって最適な診療について追及している。治療部門では、頭頸部癌等に対する放射線治療を受ける患者における有害事象の予防のために、治療前や治療中、治療後にわたって口腔管理による摂食機能や生活の質の維持向上を目指したさまざまな取り組みを行っている。特に、放射線治療を確実に完遂するための口腔衛生状態の管理手法やさまざまな装置の工夫について、基礎的・臨床的見地から多様なアプローチを進めている。学内外のコラボレーションとしては、歯学部では口腔外科学や矯正学などの臨床分野、解剖学や病理学などの基礎分野とさまざまな共同研究を行っており、医学部の放射線医学や保健学科放射線技術学などの分野との連携体制をとっている。

教育においては、歯学科2年生・3年生に対しては放射線学や解剖学の基礎的事項を、歯学科4年生に対してはこれらの臨床的事項を座学主体に行っている。歯学科5年生に対しては統合科目やPBLといった分野横断的な授業に参画し、さらに6年生にかけて、歯科放射線学の実技に関係したポリクリと臨床実習を担当している。特に、講義や実習のためのwebサイトを設けて、学生の予習・復習や確認、自己学習に配慮した授業形態をとっている。加えて、歯学科・口腔生命福祉学科1年生に対してはスタディスキルズの一部を担いつつ、歯学科3年生のインターネットチュートリアルや口腔生命福祉学科の演習・実習の一部を担い、歯学教育全般に幅広く関与している。大学院生への教育としては、時間と場所の制約を排したオンライン学習システムを導入しつつ、研究課題に即し

た柔軟な対応を行っており、学位研究に結び付けている。こうしたシステムは社会人大学院生にも積極的に門戸を広げることに役立っている。

診療は、「検討会に始まり検討会に終わる」をモットーとしている。これは教室の草創期の頃から連綿と続いている理念である。毎日（現在は見直しているが）夕方定時に行われる検討会は、原則として分野構成員全員が顔を出す必須の日常臨床業務であり、同時に研究や教育の現場でもある。同じ画像を見ながら誰もが平等に参加し、厳しく自由にお互い議論しあう。「この画像はどこまで実態を反映し、所見として客観的に抽出できるのは何と何か。それらを説明するのに最もふさわしい病態は何か、そしてその理由は。他に考えられる可能性はどうか、否定する根拠は何か。どのような細胞集団であれば、この画像所見をもたらすと考えるのが合理的か。これまでの知識や経験で納得しうる説明ができるか、想像すらしていない新たな疾患の可能性はどうか。」議論を重ねるうち、同じ画像を見ながらも経験や知識がこうも違う見方を導くのか、あるいは逆にこうも偏りを生むのかと、参加している全ての者が心に刻む貴重な機会である。漫然と見ていれば見逃してしまう細部の変化を見落とさず、しかし全体像を常に考慮しなければ木を見て森を見ずに陥りかねない。眼も頭も同時にフルに動かし、なぜ？どうしてこうなるのか？目の前の画像に対して繰り返し自分に問いかけ続ける。近頃はスピードも要求される時代となり、画像診断は日々トレーニングを重ねていかないと継続するのに骨が折れる、タフな創造的作業であることを実感する。ここで日頃から鍛えられていれば、どんな大きな学会でも臆することはない、というのは言い過ぎか。

教室員は現在、大学院生を含めて9名と臨床系でもっとも小所帯であるが、メンバー個々の能力には瞠目すべきものがある。「少数にすれば皆が精鋭になりうる」との名言を体現していると言っても過言ではない。これまでも多彩な人材を輩出し枚挙に暇がないが、十余年の在籍後に学外で活躍している例として、ドクターフキコこと小林富貴子、市議会議員の中山 均、直近では香港大学に転出した田中 礼が挙げられる。医局の所在地

については、改修後2014年に歯学部A棟の8階に入居した。実質的な最上階であり、ロケーションに恵まれているが、画像を取扱うという業務の特性ゆえに、残念ながらせっかくの眺望を満喫することはなかなかできないのが現状である。

構成員名簿

- ▶ 林 孝文（はやし たかふみ）教授（NPO 法人日本歯科放射線学会歯科放射線専門医・指導医）
- ▶ 西山 秀昌（にしやま ひでよし）准教授（NPO法人日本歯科放射線学会歯科放射線専門医）
- ▶ 勝良 剛詞（かつら こうじ）講師（NPO 法人日本歯科放射線学会歯科放射線専門医・同口腔放射腫瘍認定医）
- ▶ 池 真樹子（いけ まきこ）助教（学系）（NPO法人日本歯科放射線学会歯科放射線認定医）
- ▶ 新國 農（にっくに ゆたか）助教（学系）（NPO法人日本歯科放射線学会歯科放射線専門医）
- ▶ 中山 美和（なかやま みわ）助教（病院）（NPO法人日本歯科放射線学会歯科放射線認定医）
- ▶ 坂井 幸子（さかい さちこ）助教（病院）（一般社団法人日本小児歯科学会専門医）
- ▶ 曾我 麻里恵（そが まりえ）医員（NPO 法人日本歯科放射線学会歯科放射線認定医）
- ▶ 小林 太一（こばやし たいち）大学院生

分野webページアドレス：

<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/radiology/>



2016年5月30日撮影